
生徒の学習意欲を高める中学校英語科指導 ー学習方略を身につけさせる指導を通してー

土浦 紗弥
(児童生徒支援コース 13502010)

1 問題の把握

(1) ベネッセ調査(2009)から見る中学校英語科の課題

学習指導要領総説には、知徳体のバランスとともに「基礎・基本的な知識・技能」「思考・判断・表現力」「学習意欲」が課題とされており、学校教育においてこれらを調和的にはぐくむ必要があると示されている。特に学習意欲は学びの基盤となる重要な要素である。

ベネッセが全国の公立中学校に通う2年生に行った質問紙調査によると、もっとも英語学習のやる気が高かった時期で最も多かったのが「中1の初め頃」である一方、英語を苦手と感じるようになった時期で最も多いのが「中1の夏休み頃」であることがわかった。中学1年生の夏休み以降に、英語の学習意欲の低下がみられることがわかる。

(2) 山森(2004)の実践研究より

山森の実践研究でも、中学生の英語学習における学習意欲が2学期以降に低下することが明らかになった。学習意欲が低減する要因は「学習内容が難しくなるため」および「努力が結果に結びつかないため」の二点があげられる。また、1年間で学習意欲が維持・向上した生徒には「学習方法に工夫をしたこと」という共通点があった。このことから山森は英語の学習方法について補習授業を行うことが有効ではないかと提案している。

(3) ベネッセ(2012)対談より

ベネッセVIEW21の対談で、植阪は認知カウンセリングを生かした個別学習相談を通して、生徒の学び方の課題の共通点を見いだしている。それは「一生懸命に勉強して量をこなしているのに、質が伴っていないために学習内容が身に付いていない生徒が存在する」ということである。この点において山森の考察と共通している。

植阪は生徒の学び方の課題を示した上で、生徒の学び方と学習観を変えていく必要性を述べている。学び方の指導をしても、時間が経つと生徒は元の学び方に戻ってしまう。効果的な学び方を定着させるためには、生徒が毎日受けている授業で意図的に指導し、学習観を変えることが必要であると述べている。

2 学習方略

(1) 定義

辰野(1997)は、学習方略を「学習に効果を高めることをめざして意図的に行う心的操作あるいは活動」と定義している。これは、学習を促進する効果的な学習法・勉強法を用いるための計画、工夫、方法のことを意味している。

(2) 手立て

学習方略を教育現場に活用するとき、現場教員は多様な方略をどのようにクラスに取り入れるかという課題に直面する。学習者や教師が学習方略を活用しやすいよう、Chamotら

がメタ認知的学習方略モデルを提案している(Chamot et al., 1999)。このモデルはプランニング、モニタリング、問題解決、自己評価の4つの認知過程ごとに学習方略をまとめている。Chamot らが提案するメタ認知学習方略モデルを、授業実践において活用していく。

認知過程	学習方略(Chamot et al.,1999)	前期実習の工夫(筆者)	後期実習の工夫(筆者)
プランニング	目標を設定する 注意を集中する 背景知識を活性化する 予測する 構成を考える・計画を立てる 学習を自己管理する	目標を設定する ○毎時間ごとに到達目標を提示	目標を設定する ○到達目標をリスト化して提示 ※ 2 予測する 背景知識を活性化する ○聞き取りテスト ※ 1
モニタリング	振り返って確認する 焦点を絞る ルールをあてはめる・見つける 自分にあてはめる 全体の流れの中で考える メモをとる イメージを利用する 実物を利用する 体を動かす 自分に言い聞かせる 友達と協力する	振り返って確認する ○チェックリストの活用 友達と協力する ○協力して英文を作る (ねらい b)	振り返って確認する ○聞き取りテストの振り返り ※ 3 友達と協力する ○協力して英文を作る (ねらい a・ねらい b) 全体の流れの中で考える メモをとる ○聞き取りテスト ※ 1
問題解決	論理的に推測する 言い換える 質問して確かめる 辞書などの情報源を利用する		
自己評価	予測や推測を確かめる 要約する 目標の達成度を確認する 理解度をチェックする ストラテジーを自己評価する	目標の達成度を確認する ○毎時間の自己評価	目標の達成度を確認する ○到達目標リストに基づく自己評価 ※ 2 ストラテジーの自己評価 ○聞き取りテストの振り返り ※ 3

表1 Chamotらのメタ認知学習方略モデル(1999) を基にした授業の工夫

(3) 研究仮説

5月の前期実習では、「学習方略を明示的に指導することで、授業の理解が深まり、学習意欲が向上する」と仮説を立てた。プランニングを中心に実践したが、他の方略との関連

が弱く、方略を紹介するだけでは不十分であることがわかった。

10月の後期実習では生徒の実態を踏まえて指導する学習方略を選択した。篠ヶ谷(2012)と植阪(2010)の理論を取り入れ、Chamotのモデルを充実させるとともに、複数の学習方略に関連づけた。学習方略を使用する場面を意図的に設定することで、生徒が学習方略を活用できるようになり、学習の構えを身につけることができると仮説を修正した。

篠ヶ谷(2012)	後期実習で行った工夫(筆者)	関連する学習方略
①課題要因	聞き取りテスト	表1の※1を参照
②評価構造	到達目標リストの作成・活用	表1の※2を参照
植阪(2010)		
③教訓帰納	聞き取りテストの振り返り	表1の※3を参照

表2 篠ヶ谷(2012)・植阪(2010)を基にした授業の工夫

3 実践の概要

(1) 対象

実習協力校であるA中学校の配属学級1年A組(33名)を対象に実施した。

(2) 単元

本研究では、以下の単元で実践を行った。

実施月	単元	内容
5・6	LESSON2 My School	be動詞 is の肯定文・疑問文・否定文 疑問詞 what 代名詞主格 he, her (前期ねらい b)
10	LESSON5 Our New Friend from India	疑問詞 who, when, where 代名詞目的格 him, her (後期ねらい b)
10	We're Talking5 これだれの？	疑問詞 whose (後期ねらい a) 代名詞独立所有格 mine, his, hers (後期ねらい a)

表3 実践にかかわる単元一覧

本要旨では学習方略指導の具体的な手立てを示す一例として、「We're Talking5 これだれの？」の第2時について報告する。本授業は後期実習の「ねらい a (公開授業)」にあたる。

(3) 実践内容

【手立て1：聞き取りテスト】(プランニング・モニタリング)

聞き取りテストは教科書本文を学習したあとに実施している。本時においては We're Talking5 の本文から2問出題した。4度目の取り組みであるため、スムーズにテストに移行することができた。学習の構えをつくるためには、ある程度決まった型で繰り返し行う必要があると考える。

授業の導入で英語の歌を扱っており、本時は全員で歌を歌ったあとに聞き取りテストに移った。このことで、歌で活気づいた学級の雰囲気がやや損なわれてしまったことについて、参観された先生からご指摘を受けた。活動の順序は授業の内容に合わせて柔軟に変えていくべきである。

【手立て2：聞き取りテストの振り返り】（モニタリング・自己評価）

前期の実習では、英文を書く際に、チェックリストを用いて見直しをさせた。しかしチェックリストの項目が生徒の実態と一致しない場面があり、あまり効果的ではなかった。

そのため後期の実習では「聞き取りテスト」を用いて書く活動の自己点検を行った。聞き取りテストを自己採点した後に「どのような部分を間違えたのか」を振り返りシートに書かせることで、各々の生徒に必要な自己点検のポイントを引き出せるようにした。また、記入後は生徒数名に発表してもらうことで、シェアリングを図った。

【手立て3：友達と協力して英文を作る】（モニタリング＋協同学習）

前期実習において、友達と協力して英文を作る協同学習的な活動にモニタリングを促す効果がみられたため、後期実習でも取り入れた。本時では目標表現の活用場面においてペアやグループで取り組む場面を意図的に設定した。また、協力することの必要性とその効果を実感できるよう、中心となる活動の内容を工夫した。

協力の必要性を持たせるため、指名の方法を工夫した。6人班の席にそれぞれ1から6の番号を割り当てた。相談の時間のあと、筆者がサイコロを振り、出た目の番号と同じ番号の生徒が回答権を持つといったゲーム的要素を取り入れた。誰が答えるのか分からない緊張感が起こり、英文や答え方を確認し合うなど、活発な話し合いが起こった。

また、出題する持ち物を選定する際にも工夫を行った。身近であり、且つクラス全員が知っているとは限らない題材を取り入れることで、話し合いの必要性を持たせた。生徒の持ち物や名無しの掲示物を出題し、「誰のもの？」とたずねる必然性・文脈をもたせた。

4 考察

（1）仮説の検討 ①学習意欲

生徒の学習意欲の変化について、6月6日および10月10日の質問紙調査結果を比較する。項目「英語が好きですか」に対して肯定が6%増加し、否定が6%減少した。また、項目「英語が得意ですか」に対して、肯定が3%増加した。わずかながら、英語が好きと考える生徒数が増加した。

しかし、項目「英語が得意ですか」に対して否定が25%増加した。夏休みを経て、英語に対する苦手意識を持った生徒が増加したという点で、配属学級においてもベネッセ(2009)および山森(2004)が伝える一般的な傾向と同じ現象が起こったといえる。

	6月	10月
はい	13名(39%)	15名(45%)
いいえ	3名(9%)	1名(3%)

表4 質問紙項目1「英語が好きですか」

	6月	10月
はい	3名(9%)	4名(12%)
いいえ	11名(33%)	19名(58%)

表5 質問紙項目2「英語が得意ですか」

（2）仮説の検討 ②学習方略

聞き取りテストへの取り組みから、学習方略指導がどの程度有効であったかどうか検討する。

	第1回	第4回
メモ・推測の記述	6名(18%)	10名(32%)
無回答	4名(12%)	0名(0%)

表6 聞き取りテストの取り組み

つづりが分からない語を片仮名で記述する生徒が10名おり、第1回の時よりも4名増加した。特に第4回では、片仮名でメモをとるだけでなく、文脈から推測して単語を記述する様子が見られた。また、英文の一部がわからなかったり、聞き逃しをしたりした生徒も、手元にある情報や日ごろの音読

や暗唱の記憶を頼りに日本語訳を書いていた。「予測する」「メモをとる」「全体の流れから考える」「背景知識を活性化させる」などの方略は実際に活用されていると考える。

また、第1回では無回答の生徒が4名いた。しかし第4回では、4名とも聞き取ったものを片仮名でメモし、メモを元に単語や日本語訳を書く様子がみられた。無回答の生徒が0名になったため、特に下位層の生徒にとって、これらの方略は有効であったと考える。

(3) 課題

後期に実践した聞き取りテストの振り返りを見ると、「間違えない」「忘れない」「覚える」などの暗記に頼る記述が多い。生徒が自覚している学習方略が主に記憶ストラテジーであることが見て取れた。

山森(2004)は、英語の学習内容が中学1年の夏休み明けから難化する傾向にあることを指摘している。たとえ1年1学期の英語を小学校外国語活動の知識と暗記で乗り切ったとしても、夏休み以降も同様の学習方法を続けた場合、英語学習に対する負担感が大きくなることが予想される。配属学級においても、このことが学習意欲が低減した一因ではないかと考える。

第4回聞き取りテストの振り返りでは、「whose と who's の区別に気をつける」と記述・発表した生徒がいた。この発表を聞いて、15名の生徒が whose と who's の区別について各自の振り返りシートに追加して書き込んだ。しかし、書き込まれたものを見ると「似ているのでしっかり聞く」「whose と who's を間違えない」などの記述がある。これらの語は音が同じであるため、聞いて区別することは難しい。そのため、生徒が記述したものは方略として不適切であると考えられる。生徒が持っている不適切な学習方略を見つけ、「間違えないために、次からどのような工夫をすれば良いだろうか?」と投げかけることにより、生徒自身が持つ学習方略を見直す機会を作ることが大切であると学んだ。

また、本研究では Chamot らが提案するモデルの「問題解決」に当たる方略を授業で導入する機会がなかった。単元や題材に合わせて使用する方略を選択する必要があるだろう。

5 主な参考文献

- ベネッセ教育研究開発センター(2009)『第1回 中学校英語に関する基本調査 [生徒調査]』
- ベネッセ教育総合研究所「VIEW21[中学校版]」<http://berd.benesse.jp/berd/center/open/chu/>
- 「『自律的な学習者』を育てる学び方指導」2012年第3号
- Chamot et al. (1999) *The Learning Strategy Handbook*. New York: Longman.
- 大学英語教育学会(JACET)学習ストラテジー研究会(2006)『英語教師のための「学習ストラテジー」ハンドブック』大修館書店
- 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 総則編』
- 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- 篠ヶ谷圭太(2012)「学習方略研究の展開と展望 ―学習フェイズの関連づけの視点から―」教育心理学研究
- 辰野千壽(1997)『学習方略の心理学 賢い学習者の育て方』図書文化
- 植阪由理(2010)「学習方略は教科間でいかに転移するか ―「教訓帰納」の自発的な利用を促す事例研究から―」教育心理学研究
- 山森光陽(2004)「中学1年生の4月における英語学習に対する意欲はどこまで持続するのか」教育心理学研究